ガリシアの吟遊詩人を訪ねる旅
A viaxe polos xograres galegos

浅　香　武　和

はじめに

イベリア半島北西部のガリシア地方は、中世にガリシア語による抒情詩が華開き多くの吟遊詩人が現れた。13世紀に活躍した吟遊詩人による抒情詩を読みながら、その足跡を訪ねる旅に誘うものです。

Ⅰ　吟遊詩人とは

ヨーロッパ社会ではおもに中世の10世紀頃から15世紀頃にかけて現れ、詩曲をつくり各地を訪れて歌った人たちである。

中世ヨーロッパ文化における吟遊詩人としてのジョングルールは、低層階級の放浪の音楽師として８世紀頃からフランスの記録に現れる。彼らはとくに中世の歴史的な事件、あるいは史実についての物語を歌により広めていった。また宮廷に仕える音楽師たちも現れ、伝統的な言い回しに由来するミンストレルという技法で歌った。北フランスからドイツ各地にかけては、ゴリアールと呼ばれた放浪の学僧もいた。北イタリアでは、ラウダ（lauda, 神を讃える歌）をつくりながら伝道していた托鉢修道会士がいた。これらの人々も吟遊詩人と言える。

11世紀頃になると、南フランスの宮廷からトロバドールと呼ばれる吟遊詩人たちが現れた。彼らはイスラム文化からの影響とされる説がある。トロバドールは形式化された宮廷愛や十字軍を主題とする詩に楽器を使って歌いながら各地の宮廷を遍歴した。トロバドールたちは城主や騎士といった貴族出身のものが多く、ジョングルールやミンストレルなどは一般民衆の出自の者もいた。トロバドールとジョングルールとは地位的に明確に区別されている。イタリア北部やイベリア半島のガリシアでも彼らの活動が記録されている。

一方、ケルト社会では祭司階級であるドルイドのなかの専門職として神話や歴史、法律などを詩歌の形式で記憶し伝承する役目にバルドと呼ばれる吟遊詩人がいた。

世界各地に吟遊詩人と呼べる人々と文化は存在している。イスラム文化圏では古くから知られているし、西アフリカのグリオ、ベンガルのバウル、日本における琵琶法師などもその類と考えられる。

ガリシアの吟遊詩人は三種類のグループに分けられる。トロバドール（TROBADOR）、セグレル（SEGREL）、ショグラール（XOGRAR）で、今日知られている詩人は150名におよぶ。その出身地は、イベリア半島のガリシア、ポルトガル、カスティーリャ、レオン、アラゴンそしてイタリアのジェノバとフランスのプロバンスである。とくに、ガリシア出身では Bernal de Bonaval, Fernando Esquio, Pai Gómez Chariño, Airas Nunes, Xoán Airas, Xoán de Cangas, Mendiño, Martín Codax, Lourenzo, Pero da Ponte など30人ほどが知られている。

次の挿絵は、*Cancioneiro da Ajuda* に載っている16葉の細密画うちの２葉で、1280 年頃の様子である。最初のものは、左に座っている trobador, 中央にビオラを弾く xograr, 右に大タンバリンを敲く女性の歌い手 cantadora である。このような数人またはもう少し多い人数で、詩を朗読し楽器を奏で貴族の館などで興行をおこなった。

二枚目は、左に座っている xograr, 中央に拍子木のような楽器クラッパー（チャハール・バーラ）を両手に持って歌い踊っている女性、右側にプサルテリウムというツィター系の撥弦楽器を弾く男性で構成されている。

Trobar は「発見する、改新する」の意味から「歌をつくる」という意味になった。したがって trobador は「改新者、創造者」という意味である。すなわち、詩をつくる芸術家である。一方、xograr は聴衆の前で歌を演奏する役目の人を言い、プロフェッショナルの演奏家である。trobador と xograr の中間に位置するのが segrel である。

Ⅱ　ガリシア・ポルトガル語の抒情詩

12世紀から13世紀に中世ガリシア語を使い、イベリア半島の大邸宅で詩を作り、歌ったショグラールやトロバドールたちがいた。彼らは、宮廷に出入りして即興で詩をつくり歌い演奏した。当時、歌われた詩は吟遊詩人たちにより編纂され、その写本は現在まで伝わっている。

ガリシア語の詩はカスティーリャ地方で成功をおさめ、12世紀にカスティーリャ地方の諸都市で好んで迎え入れられたのはプロバンスの吟遊詩人であったが、13世紀初頭からカスティーリャではガリシア出身の詩人たちにとってかわられた。彼らはその芸術性を高めそして広め、イベリア半島中部と西部で抒情詩の作品は完全にガリシア語で書かれるようになったと言っても過言ではない。

ガリシア語詩の歴史的発展段階は、基本的に次の二つの時代に分けられる。

（1）ガリシア・ポルトガル派の時代

13世紀全般と14世紀前半までの時代。Cantigas de amigo（女性から男性への恋歌）の作者であるメンディーニョ Mendiño, ショアン・デ・カンガス Xoán de Cangas, マルティン・コダックス Martín Codax の三大吟遊詩人が登場して優れた作品をあらわした。また Afonso X（アフォンソ10世賢王）は『聖母マリア頌歌集』を編纂している。さらにポルトガル王ドン・ディニス（D.Denís, Afonso X の孫）もこの時代に卓越した技量をもった詩人であった。

試作期より以前の1196年頃に Xoán Soárez de Pávia によりガリシア語で書かれた Ora faz ost’o senhor de Navarra（さて、ナバーラ王が戦争を始める）で始まる風刺を謳った詩が最も古いとされている。

時代区分は次のように４区分できる。

1 試作期 1200-1225 頃
2 導入期 1225-1250 頃
3 開花期 1250-1300 頃
4 引潮期 1300-1350 頃

そして、現在確認されている写本は次の三種類がある。

❶ アジュダ写本
Cancioneiro da Ajuda, Lisboa. ポルトガルのアジュダ宮殿蔵。

1280 年頃から14世紀初頭の写本。現存する最も古い歌集。羊皮紙88葉に 38 名の詩人 310 篇の詩が収録されている。この写本の綴り合字は ll, nn（現代ガリシア語では ñ）であり、lh, nh の綴りは 1280-1285 年頃に使用されるようになった。写字生が一人で記したもの。ゴシック体の文字を使い、詩の最初の文字は大文字で黒または彩色であしらっている。楽譜はつけられていない。極彩色の挿絵が16葉おさめられている。ポルトガルの碩学 Michaëlis de Vasconcellos により校訂本が 1904 年に Halle で出版され、再版は 1990 年にリスボンで刊行。オリジナルは普通見ることができないので、我々はこの復刻の校訂本をみて研究している。

❷ バチカン写本

Cancioneiro da Biblioteca Vaticana.

16世紀初頭から編纂をはじめ 1558 年には終了している。ローマ教皇庁バチカン図書館で編纂されたもので、100 名余の詩人の作品 1,205 篇を210葉に一人の写字生が転写したもの。暫く忘れ去られていたが 1840 年に発見され、Ernesto Monaci により 1875 年に完全復刻された。

❸ 国立リスボン図書館写本

Cancioneiro da Biblioteca Nacional de Lisboa.（コロクッチ・ブランクティ Colocci-Brancuti と呼ばれている）。

これはバチカン写本とほぼ同じ年代のものであるが、コロクッチ Colocci（1474-1549）自身の注釈があり、150 名の詩人の作品 1,567 篇が335葉に 6 名の写字生によりゴシック体とバスタルド体の書体で記された。1875 年 Paolo Brancuti di Cagli 伯爵図書館で発見され、その後、所有者を変え、1924 年にポルトガル政府が入手して、現在はリンボン国立図書館蔵。覆刻本が 1982 年に同図書館より刊行されている。

バチカン本とこのリスボン本は、どちらもイタリアで写されたもので16世紀初頭のものである。

尚、リスボン本は17世紀に二部コピーされ、一部はスペインのマドリード国立図書館、もう一部はポルトガルのオ・ポルト市立図書館にある。

❹ 先の 3 種以外の写本。

Cancioneiro de Berkley

バークレイ本。この写本は19世紀末に発見され、アメリカの二人の学者アスキンズとウッドブリッヂによりバチカン本の複写であることが判明した。17世紀の複写で、一時マドリードのフェルナン・ヌーニェス伯爵家図書館にあったが、現在、カリフォルニア大学バークレイ校ブランクフォルト図書館蔵。

❺ *Cantigas de Santa María*

『聖母マリア頌歌集』。アフォンソ10世編纂であるが、多くはサンティアゴ・デ・コンポステーラの聖職者で吟遊詩人の Airas Nunes の手になるもの。いくつかの写本がある。スペインのトレド大聖堂にあったものが、現在はマドリード国立図書館蔵で、制作年代は 1255 年以降。エスコリアル修道院図書館蔵のものは 1279 年以降の制作。三つめは現在イタリアのフィレンツェ国立図書館蔵。

これらの写本には細密画と、それぞれの歌にはネウマ（ギリシア語の合図の意味）と呼ばれる記号を用いた記譜法で単旋律の楽譜が付けられている。

近代の作曲家 Luis Braxe ルイス・ブラシェ（1903-1979）の *Follas Novas*『若葉』Rapsodia gallega ガリシア狂詩曲, 1958, 第四版, Madrid の曲は、『聖母マリア頌歌集』の何番か逸してしまったが、影響があるとされている。ガリシアの作家 Ramón Otero Pedrayo（1888-1976）がとくに気に入っていた作品である。

❻ 特殊なもの

1）ビンデル写本 *Pergamiño Vindel*

1260-1300 年初頭の写本。マルティン・ゴダックスの 7 つの詩が書かれ、このうち 6 篇にはオリジナルのメロディーがつけられている。風景が恋愛テーマと緊密な関連を保ちながら、素直な感情表現の産物として登場している。海の浪、緑の松、牧場、川岸、鹿、小鳥など娘がひとり寂しく愛の問いかけをする相手に擬されたりしていて、単に流麗な装飾的要素にとどまらず、郷愁と神秘性に満ちて甘美で清冽な抒情的雰囲気を醸したてている。この

詩には、単旋律の音階で書かれた楽譜があり、ヨーロッパの詩のなかで最も美しく独創的な作品とみなされ中世を愛する演奏家たちにより、この詩は歌われている。Helena Afonso – José Peixoto（1986）の *Martín Codax*, UNISYS は、実に素朴な歌唱法でなかなかよい。これは 33 回転盤のレコードで、今となっては聴くためのプレーヤーもなくなり聴くときには不自由している。また、Ana Ferrz, soprano. César Viana, frauta de pico. *As Melodías de Martín Codax* , 1998, Xerais は、忠実に再現されていてとてもよい。

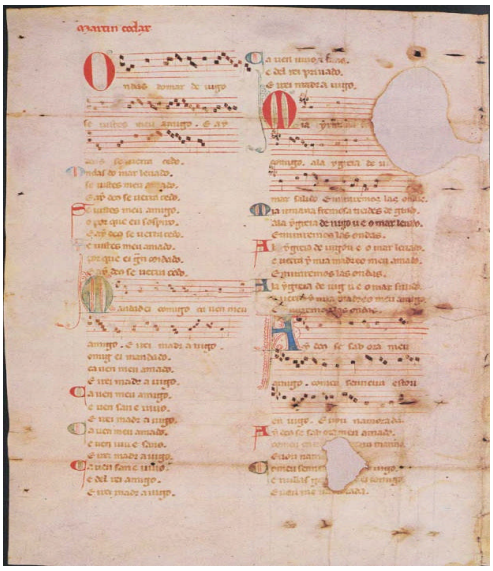
最近のものでは、*Martin Codax, Cantigas de amigo*, Fin'Amor, 2008, Pavane Records. *Martín Codax, Cantigas de amigo*, Supramúsica, Dirección Telmo Campos, 2012.この録音は、メロディーがゆっくりすぎで、歌がはっきりしないところがある。楽器演奏ももう一歩というところだ。

秀逸しているのは、ガリシアの中世音楽グループ Martín Codax は吟遊詩人と同名である。このグループの *Devotio*, Cantus Records, 2006 は技倆ともに優れている。尚、ガリシアのアルバリーニョワインの銘柄にマルティン・コダックスという白ワインがあり、このメーカーが音楽グループに協賛している。毎週木曜日の午後、醸造元で無料のコンサートが催されている。ガリシアのトラッドグループが登場して楽しませてくれる。当然、コンサートの後は、アルバリーニョワインで喉を潤すのが格別である。

日本では、杉本ゆり指揮によるラウデジー東京のソプラノ鏑木彩さんがこの歌の一番を独唱された。日本人でもガリシア語により感情をこめて素晴らしく歌いあげた。いつの日か、このグループによる収録 CD 制作を期待したいものです。

さて、この写本は 1914 年スペインのマドリードの古書店主ペドロ・ビンデルによって発見されたもので、14世紀の羊皮紙の裏に記されていたものであった。発見者の名をとりビンデル写本とされている。その後、外交官でもある音楽家の Rafael Mitjana が 1918 年 6,000 ペセタで買い取り、ウプサラに持ち帰った。

1921 年 Rafael が亡くなると、夫人が相続したが、収集家 Otto Haas に売却、さらに骨董商 Albi Rosenthal がこの写本をロンドンで競売にかけた。その時は、誰が落札したのか判らず、第二次世界大戦をはさんで 56 年間行方不明であった。そして 1977 年ニューヨークのピエールポント・モーガン図書館に所蔵されていることが判明して、公開された。



（Martín Codax, Vindel 写本一葉左側）

所蔵先が分かると、多くの学者が再び綿密な研究をすすめオリジナルに近い複製が少なくとも五種類出版され、現在に至っている。私の知己の音楽史学者 López-Calo（サンティアゴ在住で、昭和 27 年頃広島のエリザベート音楽大学で教鞭をとったことがある親日派），ポルトガルの音楽学者 Pedro Ferreira などによる研究書がある。フェレイラ氏は、中世の楽譜を現代版にアレンジしてピアノで弾けるようにした楽譜を私に贈ってくれた。マルティン・コダックス現代バージョンもなかなかいい曲である。これをピアニストの西川理香さんが甦らせてくれた。

ガリシア政府は、転売され所在が判明したガリシアの宝であるこの写本を生地に戻してほしいと再三懇願したにもかかわらず、現在はニューヨークにある。果たしてガリシアに戻る日はいつか。

2）シャーリーアー *Sharrer* 写本

13世紀末のもの。この写本は、1990 年 7 月、ポルトガルのリスボンにあるトンボ搭古文書館でアメリカの中世文学者 Harvey L. Sharrer により発見されたもので、ディニス王の恋歌 cantigas de amor 7 篇が収められていて、楽譜つきのものである。

これらの写本と同時代のものでは、日本では『新古今和歌集』が編纂され、東西で優れた歌集が編まれている。

内容からの分類

先に述べた写本の詩は、内容から次の①②③の世俗的歌集（profano）と④の宗教的歌集の二種類に区別できる。

① Cantigas de amigo カンティーガス・デ・アミーゴ。
女が男におくる恋歌。メンデス・フェリン（2000）は、この歌を「われわれが想像する現代の感性に近い」と、述べている。

② Cantigas de amor カンティーガス・デ・アモール。
男の恋歌。

③ Cantigas de escarnio e maldizer カンティーガス・デ・エスカルニオ・エ・マルディゼール。風刺などを謳った戯言および悪口の歌。

④ Cantigas mariais カンティーガス・マリアイス。
聖母マリアを讃えた宗教的な歌。

（2）ガリシア・カスティーリャ派の時代

14世紀から15世紀初頭にかけての時代。おおくの宮廷吟遊詩人が登場するが、徐々にガリシア語からカスティーリャ語へと使用する言語を変えていった。その契機になったのは D. Pedro Afonso ペドロ・アフォンソ（ディニス王の子）が 1354 年に亡くなったことによる。この派の作品は、ガリシア・ポルトガル派の時代に比べると抒情性において見劣りがする。唯一 *Cancioneiro de Baena*『バエナ詩集』が纏められている。ガリシア語の詩は、この『バエナ詩集』にあらわれるのを最後に忘れ去られ、19世紀中葉のロマン主義の到来によってガリシアのレシュルディメントと呼ばれる文藝復興期にロサリーア・デ・カストロの登場まで、まったく埋もれた存在となってしまう。

ところが、*Cancioneiro de Afonso Paez*『アフォンソ・パエス詩集』というものが近年になり新たに発見された。1380 年から 1430 年頃の後期ガリシア・ポルトガル語による吟遊叙情詩詩人アフォンソ・パエスの歌集で23篇から成る。先の時代区分によるガリシア・ポルトガル語の抒情詩の引潮期から遅れること 30 年になり、カステラニスモ（カスティーリャ語の語彙 **he** de cesar, **he** cousas sotil, da que **soy** moy namorado）が散見されることからガリシア・カスティーリャ語派による抒情詩である。

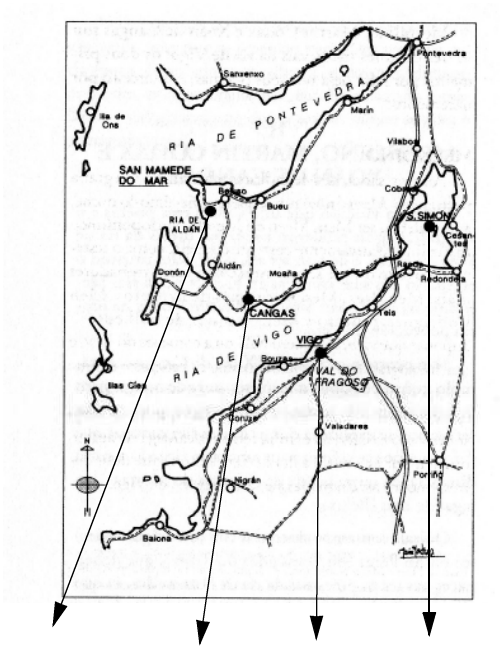
同時代の歌集は、すでに *Cancioneiro de Baena*（1350-1430 頃）の存在が確認されている。この『アフォンソ・パエス詩集』は、ガリシアの富豪オソリオ家が所有していた古文書をルーゴ県立歴史文書館に寄贈した中世文書のなかから、文書館の研究員が 2011 年に発見したもので、その後、サンティアゴ・デ・コンポステーラ大学ガリシア語学科のモンテアグード（Henrique Monteagudo）教授により解読した結果、今までにない新たな発見に繋がった。この詩集の校訂本が 2013 年 5 月に刊行され、タイトルは、詩の一行目をとり *En cadea sen prijon*（拘束のない留置）, *Cancioneiro de Afonso Paez*, Poesía galega postrobadolresca（1380-1430 ca.）, Xunta de Galicia, 2013 である。

このように、中世の古文書はまだまだ新たな発見に繋がる可能性が大である。私は、ガリシアの古書店巡りが好きだが、時には骨董店にも

足を運んでいる。新発見をするにはそれなりの知識が必要である。また、古文書解読学 paleografía も楽しい学問である。

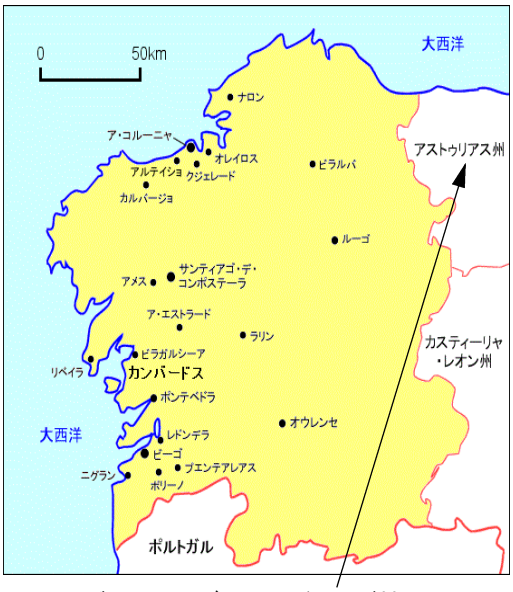
Ⅲ　ガリシア王国の吟遊詩人たち

ガリシアの三大吟遊詩人マルティン・コダックス、メンディーニョ、ショアン・デ・カンガスは、次の図に見る大西洋に面したビーゴ湾を舞台にした聖地（San Simón, Vigo, Cangas, San Mamede）を謳っている。



サン･マメデ　カンガス　ビーゴ　サン･シモン

これらの詩をカンティーガス・デ・ロマリーア cantigas de romaría（聖地詣の詩）と言うことができる。それは、聖地の宣伝も兼ねているのであろう。現在27の聖地詣の詩が知られている。



（ガリシア州図）　アジャンデ村

1. **Martín Codax**　マルティン・コダックス

ガリシアのビーゴ出身で 13 世紀中葉に活躍したショグラール xograr.アジュダ写本、リスボン写本、バチカン写本に Cantigas de amigo の 7 つの詩が載せられている。さらにビンデル写本か発見されてからは、多くの研究がすすめられた。

詩の内容は、一人の女性がペドラかラシェのサンタ・マリーア教会の傍らのアレアル浜にたたずむ。海から岩に浪が打ちつけている。愛する人は、間もなく戻る予定だか、まだ戻らず彼女は一人ぼっちである。打ち寄せる波が彼女の心を慰め、恋人はすぐに戻るかどうか浪に彼女は訊いている、というストーリーである。遠くにシエス諸島の島影に太陽が沈んでいく光景である。

この詩は、繰り返しの技法をふんだんに使っている。パラレリスモとレイシャ・プレンと呼ぶ繰り返しがある。レイシャ・プレンは、I の場合第一連の第二行が第三連の第一行に、さらに第二連の第二行が第四連の第一行に完全に繰り返される技法である。 7 つの詩はビンデル写本からの転記である。

I

Ondas do mar de Vigo,

se vistes meu amigo?
E ay'Deus, se verrá cedo!

Ondas do mar levado,
se vistes meu amado!
E ay'Deus, se verrá cedo!

Se vistes meu amigo,
O por que eu sospiro?
E ay'Deus, se verrá cedo!

Se vistes meu amado
Por que ei gran coitado?
E ay'Deus, se verrá cedo.

ビーゴ海の浪よ、
貴方はわが愛しの人にお会いになりましたか。
ああ、デウス様、彼の人はすぐに戻るでしょうか。

荒れ狂う海の浪よ、
貴方はわが愛しの人にお会いになりましたか。
ああ、デウス様、彼の人はすぐに戻るでしょうか。

貴方はわが愛しの人にお会いになりましたか。
私は彼の人を恋しく思います。
ああ、デウス様、彼の人はすぐに戻るでしょうか。

貴方はわが愛しの人にお会いになりましたか。
彼の人は私に心を痛めております。
ああ、デウス様、彼の人はすぐに戻るでしょうか。

II

Mandad' ei comigo,
ca ven meu amigo:
E irei, madr', a Vigo!

Comig'　ei mandado,
ca ven meu amado:
E irei, madr', a Vigo!

Ca ven meu amigo
e ven san' e vivo:
E irei, madr',　a Vigo!

Ca ven meu amado
e ven viv'　e sano:
E irei, madr', a Vigo!

Ca ven san' e vivo
e del rei, amigo:
E irei, madr', a Vigo!

Ca ven viv' e sano
e del rei provad:
E irei, madr', a Vigo!

文が私に届きました。
わが愛しの人は戻りますと。
ああ、母上、私はビーゴに詣ります。

私に文が届きました。
わが愛しの人は戻ると。
ああ、母上、私にはビーゴに詣ります

わが愛しの人は戻ります。
恙無く戻ります。
ああ、母上、私はビーゴに詣ります。

わが愛しの人は戻ります。
恙無く戻ります。
ああ、母上、私はビーゴに詣ります。

彼の人は恙無く戻ります。
親しき王様の伴として、
ああ、母上、私はビーゴに詣ります。

彼の人恙無く戻ります。
王様の側近として、
ああ、母上、私はビーゴに詣ります。

III

Mia yrmana fremosa, treides comigo
a la ygreia de Vig', u é o mar salido:

E miraremos las ondas!

Mia irmana fremosa, treides de grado
A la ygreia de Vigo, u é o mar levado:
E miraremos　las ondas!

A la ygreia de Vig', u é o mar levado,
e verrá y, mia madre, o meu amado:
E miraremos las ondas!

A la ygreia de Vig', u é o mar levado
e verrrá y, mia mdre, o meu amigo:
E miraremos las ondas!

わが愛しき妹よ、私と詣りましょう
ビーゴの教会へ、そこは荒れ狂った海。
そして浪を眺めましょう。

わが愛しき妹よ、喜びとともに詣りましょう。
ビーゴの教会へ、そこは荒れ狂った海。
そして浪を眺めましょう。

ビーゴの教会へ、そこは荒れ狂った海、
母上、わが愛しの人は戻ります。
そして海を眺めましょう。

ビーゴの教会へ、そこには浪立つ海、
母上、わが愛しの人は戻ります
そして浪を眺めましょう。

IV

Ay Deus, se sab' ora o meu amigo
com' eu senneira estou en Vigo!
E vou namorada!

Ai Deus, se sab' ora o meu amado
com' eu en Vigo senneira manno!
E vou namorada!

Com' eu senneira estou en Vigo
e nullas gardas non ei comigo!
E vou namorada!

Com' eu senneira en Vigo manno,
e nullas gardas migo non trago!
E vou namorada!

E nullas gardas non ei comigo,
ergas meus ollos que choraran migo!
E vou namorada!

E nullas gardas migo trago,
ergas meus ollos que choran ambos!
E vou namorada!

ああ、デウスさま、もしわが愛しの人をご存知でしたら
私は独りでおりますとお伝えください。
私は彼人を愛しく思っております。

ああ、デウスさま、もしわが愛しの人をご存知でしたら
私は独りでビーゴにおりますとお伝えください。
私は彼人を愛しく思っております。

私は独りでビーゴにおりますから
私の他には誰もおりません。
私は彼人を愛しく思っております。

私は独りでビーゴにおりますから、
誰も私のところには参りません。
私は彼人を愛しく思っております。

私には誰もおりません。
心の中では泣いております。
私は彼人を愛しく思っております。

誰も私のところには参りません。
二人とも心の中で泣いております。
そして私は彼人を愛しく思います。

V

Quantas sabedes amar amigo
treides comig' a lo mar Vigo:
E bannar nos emos nas ondas!

Quantas sabedes a mar amado
treides comig' a lo mar levado:
E bannar nos emos nas ondas!

Treides comig' a lo mar de Vigo
e veremolo meu amigo:
E bannar nos emos nas ondas!

Treides comig' a lo mar levado
e veeremolo meu amado:
E bannar nos emos nas ondas!

どれほど愛しの人を慈しむことができましょうか。
ビーゴの海に私とお出でください。
そして波間で戯れましょう。

どれほど愛しい彼人をご存じでしょうか。
浪立つ海に私とおいで下さい。
そして波間で戯れましょう。

ビーゴの海に私とおいで下さい。
そしてわが愛しの人にお会いしましょう。
そして波間で戯れましょう。

荒れ狂う海へ私とお出でください。
そしてわが愛しの人にお会いしましょう。
そして波間で戯れましょう。

VI

Eno sagrado, en Vigo,
baylava corpo velido:
Amor ei!

En Vigo, no sagrado,
baylava corpo delgado:
Amor ei!

Baylava corpo delgado,
que nunca ouver' amado:
Amor ei!

Bailava corpo velido,
que nunca ouver' amigo:
Amor ei!

Que nunca ouver' amigo,
ergas no sagrad', en Vigo:
Amor ei!

Que nunca ouver' amado
ergas en Vigo, no sagrado:
Amor ei!

聖なるビーゴの地で、
美しき体が踊っていた。
私には愛があります。

聖なるビーゴの地で、
しなやかな体が踊っていた。
私には愛があります。

美しき体が踊っていた
愛しい人がいるとは決して思えないように。
私には愛があります。

しなやかな体で踊っていた
愛しい人がいるとは決して思えないように。
私には愛があります。

愛しい人がいるとは決して思えず、
聖なるビーゴの地をのぞいて
私には愛があります。

愛しい人がいるとは決して思えず、
聖なるビーゴの地をのぞいては
私には愛があります。

VII

Ay ondas, que eu vin veer
se me saberedes dizer
por que tarda meu amigo
sen mi?

Ay ondas, que eu vin mirar,
se me saberedes contar

por q.t.m.a.s.my

ああ、浪よ、私は貴方に会いに参りました。
さあ、私に応えてください。
なぜ　わが愛しき人は私のもとになかなか帰らないのか。

ああ、浪よ、私は貴方に会いに参りました。
さあ、私にお話しください。
なぜ　わが愛しき人は私のもとになかなか帰らないのですか。

2. Mendiño メンディーニョ

ガリシアで 13 世紀から 14 世紀初頭に活躍したショグラール xograr. 地名 Mendo に縮小辞 inno を付加して Mendiño という芸名にした。サン・シモン島を舞台にした cantiga de amigo 一篇 24 行が知られている。ミカエリス・バスコンセーロスは、12 回にわたる二行の繰り返しの技法は、最も美しい恋歌で、吟遊詩人の優れた才能を表している、と述べている。リスボン写本を注釈した Joaquim Nunes ジョアキン・ヌーネス（1926）本から転記。

Sedia-m’eu na ermida de San Simion
e cercaron-mi as ondas, que grandes son:
eu atendend’o meu amigo,
eu atendend’o meu amigo.

Estando na ermida ant’o altar,
[e] cercaron-mi as ondas grandes do mar:
eu atendend’o meu amigo,
eu atendend’o meu amigo.

E cercaron-mi as ondas, que grandes son,
non ei[i] barqueiro, nen remador:
eu atendend’o meu amigo.
eu atendend’o meu amigo.

E cerxaron-mi as ondas do alto mar,
Non ei[i] barqueiro, nen remador:
eu atendend’o meu amigo,
eu atendend’o meu amigo.

Non ei i barqueiro, nen remador,
morrerei fremosa no mar maior:
eu atendend’o meu amigo!
eu atendend’o meu amigo!

Non ei [i] barqueiro, nen sei remar
Morreirei fremosa no alto mar:
eu atendend’o meu amigo!
eu atendend’o omeu amigo!

私はサン・シモン島の礼拝堂にいました
すると大波が押し寄せてきました。
私が待っているのは恋人なの、
私が待っているのは恋人なの。

私が礼拝堂の祭壇に祈っていると、
海から大波が押し寄せてきました。
私が待っているのは恋人なの、
私が待っているのは恋人なの。

大波が私に押し寄せてきました、
私には櫂もなく、渡し守もいない。
私が待っているのは恋人なの、
私が待っているのは恋人なの。

遥か外海から大波が私に押し寄せてきました、
私には舟を漕ぐ術も知らず、渡し守もいない。
私が待っているのは恋人なの、
私が待っているのは恋人なの。

私には櫂もなく、渡し守もいない、
大海原に私は美しく死んでしまう。
私が待っているのは恋人なの、
私が待っているのは恋人なの。

私は舟を漕ぐ術も知らず、渡し守もいない、
遥か外海に私は美しく死んでしまう。
私が待っているのは恋人なの、
私が待っているのは恋人なの。

3. **Xoán de Cangas**

ショアン・デ・カンガス。イタリア人の校訂本には Joham de Cangas と記されている。

ガリシアのビーゴ付近の出身で 13 世紀末から 14 世紀にかけて活躍したショグラール xograr 聖地サン・マメデを舞台にした三篇の Cantigas de amigo が知られている。ブエウのベルソ地区に属するアルダンにあるボン村のサン・アメディオ隠修堂で恋歌を謳ったもの。この吟遊詩人は、カンガス・ド・モラソに生まれ、隠修堂は生地の近くに 13 世紀半ばに創建されたものである。したがってメンディーニョやマルティン・コダックスもビーゴ湾を囲む近隣で活躍していた。

聖地サン・マメデの８月の夏祭りにブエウとカンガスの農民や漁民が集まることを謳ったもので、現在でも樫の木のもとに礼拝堂があり聖アメディオを祀ってある。

話のストーリーは、娘が恋人と一緒にサン・マメデのお祭りに出かけたいと、母にお願いするが許されず、恋人は彼女が祭りに来ていないことを嘆き、神に会わせてほしいと懇願して、サン・マメデの礼拝堂で待つことにする。

I

En San Mamed’ u sabedes
que viste-lo meu amigo
oj’ouver’a seer migo:
mia madre, fé que devedes,
leixedes- mi- o ir veer.

O que vistes esse dia
andar por mi mui coitado
chegou-m’ora seu mandado:
madre, por Santa Maria
leixedes- mi- o ir veer.

Pois el foi d’atal ventura
que sofreu tan muito mal
por mi e ren non lhi val,
mia madre, e por mesura
leixedes- mi- o ir veer.

Eu serei por el coitada,
pois el é por mi coitado;
se de Deus ajades grado,
madre ben aventurada,
leixedes- mi- o ir veer.

II

Fui eu madr’, a San Mamed’u, me cuidei
que veess’o meu amigu’e non foi i;
por mui fremosa que triste m’en
parti
e dix’eu como vos agora direi;
pois i non ven, sei ûa ren:
por mi se perdeu, que nunca lhi fiz
ben.

Quando’eu a San Mamede fui e non
vi
meu amigocon que quisera falar,
a mui gram sabor, nas ribeiras do mar,
sospirei no coraçon e dixe’assi:
pois i non ven, sei ûa ren:
por mi se perdeu, que nunca lhi fiz ben.
Depois que fiz na ermida oraçon
e non vi o que mi queria gram ben,
con gram pesar filhou- xi- me gram tristen,
e dix[i] eu log’ assi esta razon:
pois i non ven, sei ûa ren:
por mi se perdeu, que nunca lhi fiz ben.

III

Amigo, se mi gram ben quederes,
id’ a San Mamed’ e veer-me-edes:
oji non mi mençades, amigo.

Pois mi aqui ren non podedes dizer,
id’u ajades comigo lezer:
oje non mi mençades, amigo.

Serei vosqu’ en San Mamede do Mar,
na ermida, se mi-o Deus aguisar:
oji non mi mençades , amigo.

I は、七音節五行詩の四連。最初の四行は終わりから二番目の音節にアクセントがあり、五行目は最後の音節にアクセントがある。脚

韻は abba/C である。

II は、三連の六行詩。最初の四行は 11 音節の最後の音節にアクセントがくる。残りの二行は、最初が八音節、次が 11 音節。脚韻は abba/CC.

III は、三行詩の三連。最初は九音節最後の音節にアクセントがあり、次は 10 音節、最後は九音節で後ろから二番目の音節にアクセントがある。脚韻は aa/B.

4. Fernán do Lago

フェルナン・ド・ラゴ

13世紀から14世紀初めに活躍したショグラール xograr で、 唯一知られているカンティーガス・デ・アミーゴの詩がある。アストゥリアス州の山岳地帯ポラ・デ・アジャンデ（Pola de Allande）市のはずれにあるラゴ（Lago）村のサンタ・マリーア・ド・ラゴ（Santa María de Lago）教会は、サンティアゴ巡礼路の北ルートにある。次の詩は、cantigas de romaría（聖地詣）をテーマにした cantigas de amigo に分類できる。サンティアゴ巡礼路の北ルートにあるサンタ・マリーア・ド・ラゴ教会に詣で詠んだ詩である。アジャンデ村は、言語的にはガリシア語東部方言に含まれるアストゥリアス自治州西部に位置する。ガリシア州ルーゴ県フォンサグラダ市から県道を進みアストゥリアス州グランダス・デ・サリメを経由して県道14号線の急所パト峠（1,146m）を超えて一時間ほどで到着。

ラゴ村に着くと、車を降りて山道をオーロ川めざして下り教会に辿り着いた。教会の傍には500年の年輪を刻む高さ 20m、幹の周り 5m もある大きなイチイ（アストゥリエス語で teixu）の木が聳えている。このイチイの木は何百年もの間、巡礼者たちを見つめたことであろうと思うと、感慨もひとしおである。

アジァンデ市には、14世紀に造られたルネサンス様式のペニャルバ宮殿がある。

そして、私たち調査班はヌエバ・アジャンデサ Nueva Allandesa というホテル兼レストランに入り、典型的なアストゥリアス料理コンパンゴ（compango）を注文することにした。コンパンゴは、煮たインゲン豆を添え蒸した肉料理でチョリーソ、モルシージャ、ラコーン、トシーノを混ぜた盛り合わせ料理。かなりボリュームがある。アストゥリアスの山岳地帯は、かつて鉱業で栄えた町があり、ホテルやレストラン、さらには温泉施設などがあったが、現在は寂れたところになってしまった。しかし、2013年夏に Coiras に1032年に創建されたベネディクト派の修道院を改装したパラドールがオープンして観光客を呼び寄せる計画が始まった。観光学が専門の畠中氏（久留米大）が早速このパラドールを視察したようである。

人口 2,800 のアジャンデから 20km に位置するカンガス・デ・ナルセア（Cangas de Narcea 人口 15,000）に向かう。この町は、山の懐にできた小都市といってもいい。街のなかの通りの名や店の名はアストゥリエス語を使っている。アストゥリエス語の言語推進の一環であろう。

カンガスでは、アストゥリエス言語アカデミーが主催する夏季アストゥリエス語講座がある。標識や表示などはアストゥリエス語が使われ、「通り」は Cai,「閉店」は写真のように **PIECHAU ピィエチャウ**である。動詞は pesllar, 過去分詞は pesllao が標準アストゥリエス語である。カンガスの地域は標準アストゥリエス語とは異なる表記を使っている。そもそもアストゥリエス語の表記法の統一はなく、いくつかの団体が提唱するものがあり、それぞれ異なるものがある。

ガリシア語は次の写真にみるように **pechado ペチャード**である。サンティアゴ・デ・コンポ

ステーラ市街地の商店の案内には、スペイン語 cerrado と英語 closed が併記してあるように、観光客向けに丁寧な対応である。

さて、唯一知られているフェルナン・ド・ラゴの恋歌は、つぎのようである。

D’ir a Santa Maria do Lagu’ei gran sabor
E pero non irei alá, se ant’I non for,
Irmãa, o meu amigo.

D’ir a Santa Maria do Lagu’émi gran ben,
E pero non irei alá, se ant’i non vén,
Irmãa, o meu amigo.
Gran sabor avería eno meu coraçon
d’ir a Santa Maria, se I achass’entón,
irmãa, o meu amigo.
Ja jurei noutro día, quando m’ende partí,
Que non foss’a l’ermida, se ante non foss’I,
Irmãa, o meu amigo.

ラゴのサンタ・マリーアに行けば大いなる喜びを感じます、
でも、そこには詣りません、もし彼の人がお出でにならなければ、
わが愛しのかた。
ラゴのサンタ・マリーアに行くことは、私には大きな宝物、
でも、そこには詣りません、もし彼の人がお出でにならなければ、
わが愛しのかた。
そこに出かけたとき、私はいつの日か誓います、
隠修堂に詣でれば、彼の人にお会い出来ると、
わが愛しのかた。

おわりに

中世ガリシア語を読むための発音

中世ガリシア語と現代ガリシア語には若干の相違がある。その点を注意すると、次の点があげられる。

●ティルド記号が上部に付いた母音 ã は鼻音化する。例: irmãa, são.

●母音が二つ連続する時は長く伸ばす。二音節とする。例: veer.

● j は、現代語の x/ʃ/のように発音できるが、実際の音はポルトガル語、フランス語、現代英語の文字と同じく発音する。例: igreja, hoje, hajades.

中世ガリシア語にも x の文字があったが、これは今日のガリシア語と同じように/ʃ/と発音する。例: dixe, leixedes.

● ss が二つ連続する合字は、一つの s と同じでよい。しかし、中世語ではそれぞれ区別する。無音の s: esse, assi.

有声の s: pesar, quisera, aguisar, desde.

●文字 c, ç, z は注意が必要である。c, ç は /ts/: cedo, cercaron, oraçon.

z は/ds/:razon.

●文字 b,v は中世語では異なる。bailava、bo.

● Quantas は cantas, cuantas と発音する。Quando は cando, cuando と発音する。

参考書目

Asaka, T.（1989）: “Mendiño”, *A Cantiga e Mendiño en 28 linguas*, X. Alonso Montero（ed.）, Xunta de Galicia, pp. 95-96.

Asaka, T.（2010）: “Martín Codax ao xaponés”, *As sete cantigas de Martín Codax en dez idiomas*, Concello de Vigo. pp.90-97.

浅香武和（2011）:「中世ガリシア文学」『ガリシアを知るための 50 章』明石書店 pp.202-206.

Ferreira, M.P.（1986）: *O Som de Martin Codax*. Lisboa.

Filgueira Valverde, X.（1992）: *Estudios sobre lírica medieval*. Galaxia, Vigo.

González Pérez, C.（1998）: *Meendiño, Martín Codax, Xoán de Cangas.* Toxo Souto, Noia.

Instituto da Lingua Galega: *Dicionario de decionarios do galego medieval.* Ed. dixital.

Méndez Ferrín, X.（2000）: *A Poesía medieval galego vista desde os relanzos derradeiros do século XX*. Real Academia Galega, A Coruña.

Monteagudo, H. / Pozo Garza, L. / Alonso Montero, X.（1998）: *Tres poetas medievais da Ría de Vigo*. Galaxia, Vigo.

Monteagudo, Henrique（1998）: *O son das ondas*. Galaxia. Vigo.

Quexas Zas, M.（1998）: *Os trobadores do Reino de Galiza.* A Nosa Terra,Vigo, 4ª ed.

Tavani, G. et Lanciani, G.（org.）（2000）: *Dicionário da literatura medieval galego e portuguesa*. 2ª ed. Caminho, Lisboa.

Tavani, G.（1986）: *A poesía lírica galego-portuguesa*. Galaxia, Vigo.

Tavani, G.　（2002）: *Trovadores e jograis*. Caminho, Lisboa.

（本学非常勤講師）